

# 岡山医学会雑誌

第68巻5号(第727号)

昭和31年5月31日発行

616.314

## 岡山大学医学部歯科学教室

### 開講5ヶ年間に於ける外来患者並びに 入院患者の統計的観察

岡山大学医学部歯科学教室(主任・渡辺教授)

|   |   |   |   |
|---|---|---|---|
| 藤 | 岡 | 幸 | 雄 |
| 小 | 野 |   | 一 |
| 西 | 嶋 | 克 | 巳 |
| 香 | 川 | 凱 | 二 |

〔昭和31年2月1日受稿〕

#### I 緒言

今川教授の御尽力により昭和25年6月18日我が岡山大学医学部に歯科学教室が開講されてから本年度丁度満5ヶ年に相当する。一方時あたかも今川教授の大阪大学への御転任が決り、残念乍らこの5ヶ年を以て遂に岡山大学を去られる事になり開講5ヶ年は丁度今川教授の在職期間に相当する事となつたので、今川教授の御偉徳を偲びつゝ5ヶ年間に於ける外来並びに入院患者の統計的観察を試みてみた。

#### II 研究並びに方法

研究対照としては、昭和25年7月初めより昭和30年6月末迄の満5ヶ年間に於ける外来並びに入院患者の全部について行つた。外来患者は先ず年度別に分類を試みた。次いで疾患別として炎症、齲蝕、歯槽膿漏症、歯肉炎、腫瘍及び其の他の疾患に分類し、齲蝕は更に根管治療を要したものとその必要の無かつた軽度のものに二分した。但し炎症の項に於

ては歯髓炎及び歯肉炎を除いてあり、殆んど齲蝕より继发した歯性炎症で占められ、口内炎や特殊炎症等が僅かに加わっているに過ぎず、炎症即ち歯根膜及びそれより外部に拡つた歯性炎症の意に解して大過無きものと思う。然る後その各々の疾患について季節別、歯別、男女別、年令別並びに職業別に統計的観察を試みた。入院患者は人数が少なかつたので年度別と疾患別についてのみ観察した。

#### III 統計成績並びに観察

表1は外来患者を年度別に分けた成績であつて、各年度の患者数を右端に示した。但し昭和25年及び30年は半ヶ年で他の年は1ヶ年の総数である。年度を経るに従い、患者数に於て若干宛増加が認められた。尚同時に各種疾患群毎に年度別に患者数を検査したが特記すべき事項は認められず、只齲蝕及びそれに附随した炎症が各年度共に圧倒的に多数を占め、歯槽膿漏症が之れに次いで居り、やはり歯科領域に於ては齲蝕と歯槽膿漏症が非常に多い疾患である事を痛感させられた。

第1表 外来患者年度別数

| 年度  | 炎症   | 齲蝕    |      | 歯槽膿漏症 | 歯肉炎 | 腫瘍  | その他の疾患 | 計    |
|-----|------|-------|------|-------|-----|-----|--------|------|
|     |      | 非根管治療 | 根管治療 |       |     |     |        |      |
| 昭25 | 235  | 63    | 147  | 74    | 50  | 10  | 142    | 721  |
| 26  | 488  | 154   | 305  | 153   | 110 | 24  | 297    | 1531 |
| 27  | 497  | 136   | 312  | 156   | 106 | 23  | 311    | 1541 |
| 28  | 581  | 156   | 346  | 137   | 101 | 24  | 413    | 1758 |
| 29  | 588  | 159   | 367  | 185   | 124 | 30  | 384    | 1837 |
| 30  | 306  | 59    | 185  | 106   | 65  | 20  | 214    | 955  |
| 計   | 2695 | 727   | 1662 | 811   | 556 | 131 | 1761   | 8343 |

表2は炎症性疾患を季節別に分類したものである。5月、7月、9月が比較的多く、10月より2月迄の寒い季節には割合少なく、その他の月は大体平均値に近い人数値が得られた。

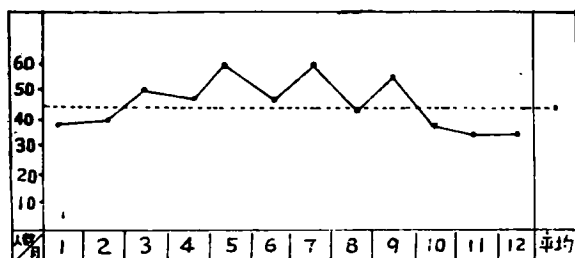
第2表 外来患者季節別分類(その1)  
炎症

表3は非根管治療齲蝕患者を季節別に分類したもので1月、7月、11月が多く、2月及び3月が少なかった。

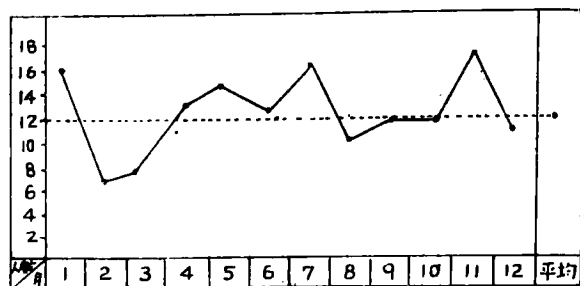
第3表 外来患者季節別分類(その2)  
非根管治療

表4は根管治療を要した齲蝕患者を季節別に分類したもので、5月から7月迄が比較的多く、8月と11月より1月に至る寒い期時に少なかった。歯髓炎を主とするためか表2の炎症性疾患の場合と割合よく似た数値曲線が得られたのは興味ある所である。

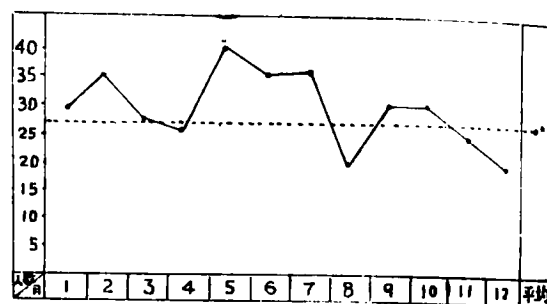
第4表 外来患者季節別分類(その3)  
根管治療

表5は歯槽膿漏症を季節別に分類したもので、2月に僅かに高い値を示した他、全体的に平均した数値が得られたのは慢性疾患のためと思われる。

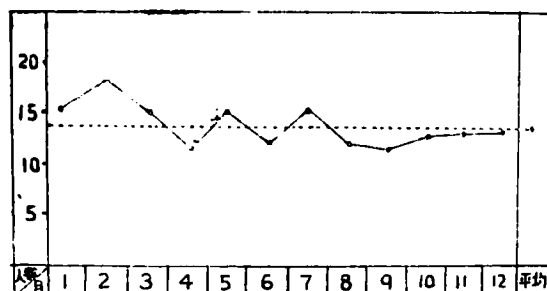
第5表 外来患者季節別分類(その4)  
歯槽膿漏症

表6は歯肉炎患者を季節別に分類したもので1月が特に多く、6月及び7月が非常に少なかった他は大体平均した数値を示している。

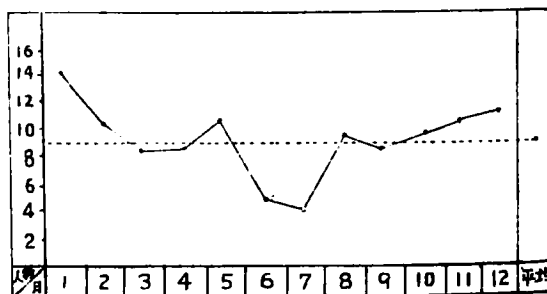
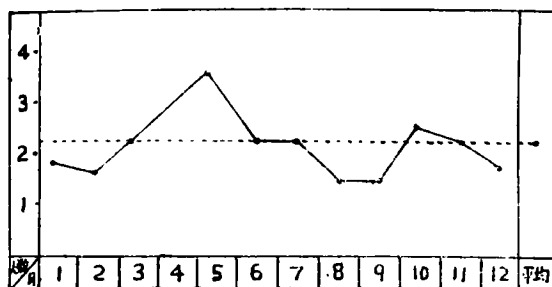
第6表 外来患者季節別分類(その5)  
歯肉炎

表7は腫瘍性疾患を季節別に分類したもので、4月、5月の春季が割合多く、8月、9月、及び12月より2月に至る夏季と冬季に比較的少なかったが総数が少ないので結論的なことは言及し難い。

表8は炎症疾患を歯別に分類したもので、下顎に於ては智歯が圧倒的に多く次いで大臼

第7表 外来患者季節別分類 (その6)

腫 瘍

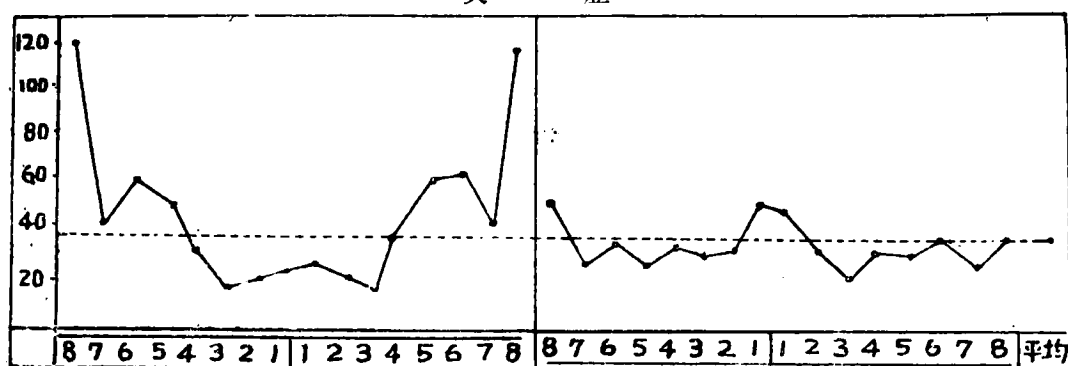


歯が比較的多数を占め、前歯部が少ない傾向が認められた。上顎に於ては大體平均した数値を示している。

表9は非根管治療の齲蝕患者を歯別に分類したもので下顎に於ては第一大臼歯が非常に多く、第二大臼歯、第二小臼歯が之れに次ぎ前歯部は非常に少ない傾向が見られた。之れに対して上顎では前歯部及び第一大臼歯が比較的多く、小臼歯部と第二及び第三大臼歯が

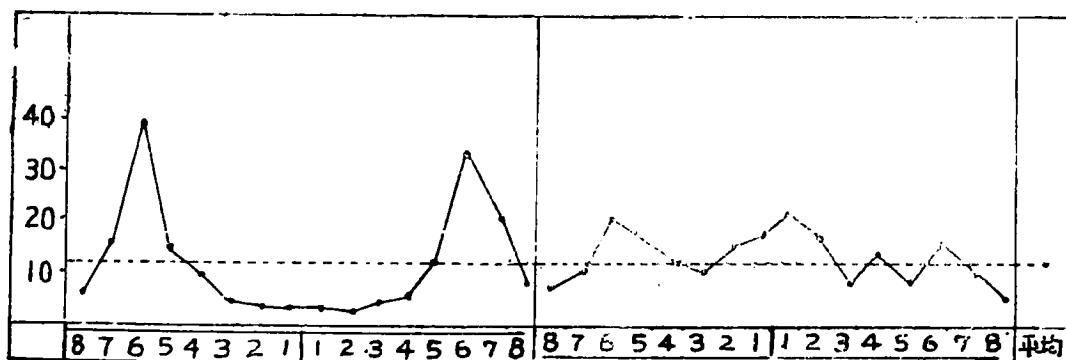
第8表 外来患者歯別分類 (その1)

炎 症



第9表 外来患者歯別分類 (その2)

非根管治療

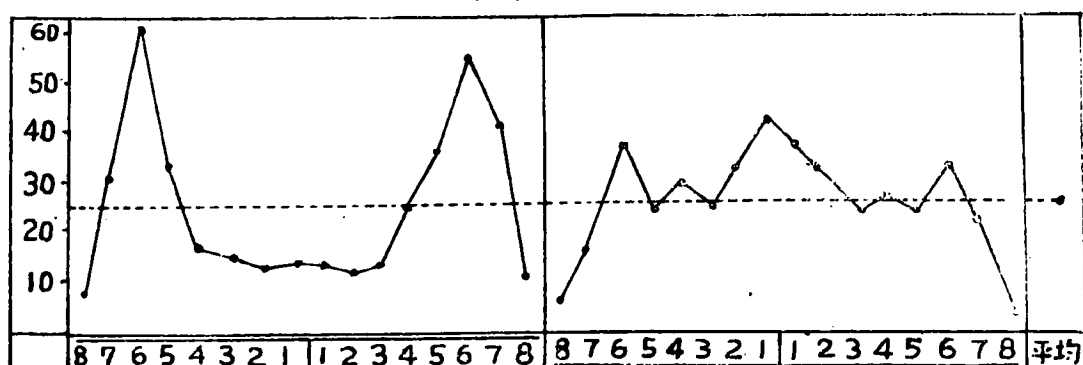


割合少ないが、下顎に比べると一般に平均した数値を示している。

表10は根管治療を要した齲蝕患者を歯別に分類したものであるが、之れは上下顎共に非

第10表 外来患者歯別分類 (その3)

根 管 治 療





年令の増減と共に減少している。

表15は根管治療を要した齲蝕患者の男女別並びに年令別分類であるが、男女別、年令別共に前記の非根管治療の場合と殆んど同様の傾向が見られる。

第15表 外来患者男女別並びに年令別分類  
(その3) 根管治療

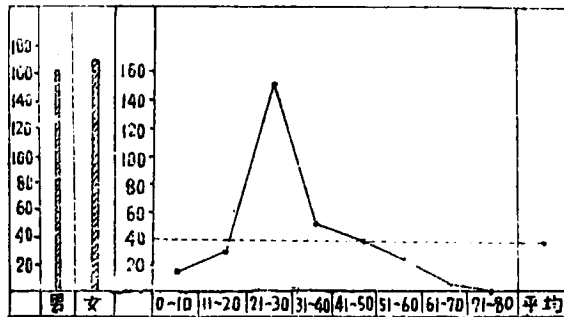


表16は歯槽膿漏症の場合の男女別並びに年令別分類で男女別では割合女性に多い事が認められる。年令別では20才台が一番多く増令並びに減令と共に少なくなっているが、減少の度合が非常に弱くて数値曲線は鈍い山型を示している。

第16表 外来患者男女別並びに年令別分類  
(その4) 歯槽膿漏症

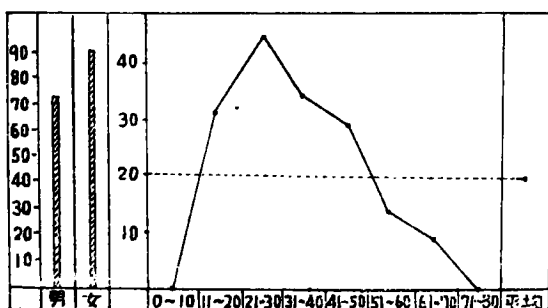
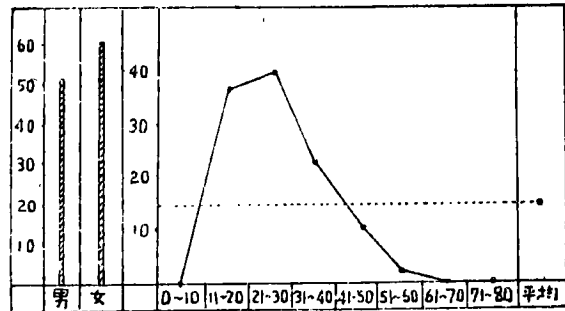


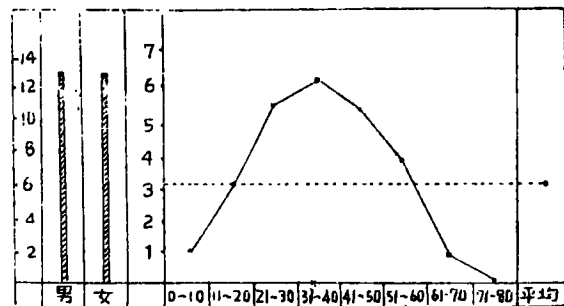
表17は歯肉炎の場合の男女別並びに年令別分類であるが、男女別、年令別共に前記の歯槽膿漏症の場合と同一傾向が認められる。唯歯槽膿漏症の場合に比べて年令が多少若年に偏っており、10才台が20才台と殆んど同じ位多いのが注目される。

表18は腫瘍患者の男女別並びに年令別分類で、男女別では差が無く、年令別では30才台が最も多く、年令の増減と共に僅かづつ減少し、鈍い山型の数値曲線を示している。他の疾患に比べると年令の増加傾向が認められ

第17表 外来患者男女別並びに年令別分類  
(その5) 歯肉炎



第18表 外来患者男女別並びに年令別分類  
(その6) 腫瘍



る。

表19は外来患者各疾患に於ける職業別分類で、主婦が最も多く、学生及び農業が之れに次ぎ、次に多いものとして医師、看護婦、官公吏が挙げられる。学生、医師、看護婦が多いのは大学病院の為と思われ、農業が多いのは附近に農村が多い中都市のためと考えられる。官公吏が多いのは官立大学のためと見られる。

第19表 外来患者職業別分類

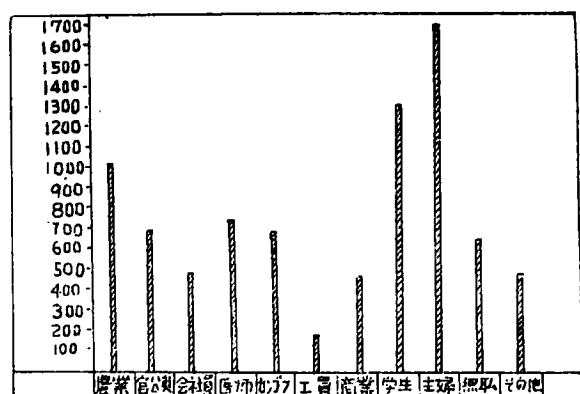


表20は入院患者の年度別数で、各年度の総数を右端に記載してある。多来の場合と同じ

第20表 入院患者年度別数

| 年度 | 炎症  | 腫瘍 | 畸形 | 骨折及び顎関節疾患 | その他の疾患 | 計   |
|----|-----|----|----|-----------|--------|-----|
| 25 | 3   | 3  | 0  | 0         | 1      | 7   |
| 26 | 17  | 11 | 3  | 1         | 1      | 33  |
| 27 | 9   | 14 | 4  | 3         | 1      | 31  |
| 28 | 14  | 16 | 5  | 3         | 2      | 40  |
| 29 | 52  | 21 | 9  | 5         | 2      | 89  |
| 30 | 20  | 9  | 2  | 4         | 2      | 37  |
| 計  | 115 | 74 | 23 | 16        | 9      | 237 |

く昭和25年と30年は6ヶ月間で他は1年間の総計を示してある。5ヶ年間の総数は237名で年度を追って漸次増加の傾向が窺われる。

表21は入院患者の疾患別分類を一覧表として示した。炎症が最も多くて入院患者総数の約50%を占め、次いで腫瘍が多くて、約30%を占めている。各疾患については総数が少ないので細部に互る統計はさし控えた。

第21表 入院患者疾患別分類

| I 炎症 115例          |         |     |
|--------------------|---------|-----|
| 1. 急性炎症            | 78例     |     |
| (I) 急性顎骨周囲炎        | (顎骨々膜炎) | 18例 |
| (II) 智歯周囲炎         |         | 16例 |
| (III) 口底炎          |         | 11例 |
| (IV) 頬部膿瘍          |         | 10例 |
| (V) 多発性歯肉膿瘍        |         | 7例  |
| (VI) 口内炎           |         | 4例  |
| (VII) 急性歯槽骨炎       |         | 4例  |
| (VIII) 急性顎骨々髄炎     |         | 3例  |
| (IX) 急性化膿性淋巴腺炎     |         | 3例  |
| (X) 扁桃周囲膿瘍         |         | 1例  |
| 2. 慢性炎症            | 37例     |     |
| (I) 歯槽膿漏症          |         | 8例  |
| (II) 放線状菌症         |         | 8例  |
| (III) 歯肉腫          |         | 6例  |
| (IV) 歯根肉芽腫         |         | 4例  |
| (V) 慢性顎骨々髄炎        |         | 3例  |
| (VI) 慢性歯槽骨炎        |         | 2例  |
| (VII) 外歯瘻          |         | 2例  |
| (VIII) デランチン性歯肉増殖症 |         | 2例  |
| (IX) 線維腫性歯肉増殖      |         | 2例  |

| II 腫瘍 74例        |     |     |
|------------------|-----|-----|
| 1. 良性腫瘍          | 56例 |     |
| a. 歯系腫瘍          | 32例 |     |
| (I) 歯根嚢胞         |     | 19例 |
| (II) 濾胞性歯嚢胞      |     | 7例  |
| (III) エナメル上皮腫    |     | 5例  |
| (IV) 歯腫          |     | 1例  |
| b. 非歯系腫瘍         | 24例 |     |
| (I) 術後性頬部嚢胞      |     | 8例  |
| (II) 乳嚢腫         |     | 3例  |
| (III) 線維腫        |     | 3例  |
| (IV) 口蓋内被腫       |     | 2例  |
| (V) 唾液腺腫瘍        |     | 2例  |
| (VI) 上顎正中嚢胞      |     | 2例  |
| (VII) ガマ腫        |     | 2例  |
| (VIII) 血管腫       |     | 1例  |
| (IX) 骨腫          |     | 1例  |
| 2. 悪性腫瘍          | 18例 |     |
| (I) 上顎癌          |     | 13例 |
| (II) 下顎癌         |     | 2例  |
| (III) 舌癌         |     | 1例  |
| (IV) 頬部癌         |     | 1例  |
| (V) 肉腫           |     | 1例  |
| III 畸形 23例       |     |     |
| (I) 口蓋被裂         |     | 10例 |
| (II) 埋伏歯         |     | 4例  |
| (III) 下顎前突       |     | 3例  |
| (IV) 兔唇          |     | 2例  |
| (V) 小顎症          |     | 2例  |
| (VI) 智歯難生症       |     | 1例  |
| (VII) 上顎前突       |     | 1例  |
| IV 骨折及び顎関節疾患 16例 |     |     |
| (I) 下顎骨々折        |     | 8例  |
| (II) 顎関節強直症      |     | 4例  |
| (III) 上顎骨々折      |     | 3例  |
| (IV) 歯槽骨々折       |     | 1例  |
| V その他の疾患 9例      |     |     |
| (I) 三叉神経痛        |     | 3例  |
| (II) 白血病         |     | 2例  |
| (III) 唾石症        |     | 1例  |
| (IV) 唾液瘻         |     | 1例  |
| (V) 上顎洞穿孔        |     | 1例  |
| (VI) 水癌後瘢痕形成     |     | 1例  |

## IV 結 論

昭和25年7月初めより昭和30年6月末迄の満5ケ年間に於ける岡山大学医学部歯科外来並びに入院患者について統計的観察を行った。外来患者を炎症（歯髄炎及び歯肉炎を除く）、齦蝕（根管治療を要したものと必要とせざる軽度のものの二つに分つ）、歯槽膿漏症、歯肉炎、腫瘍及びその他の疾患に分類し、その各々の疾患群について年度別、季節別、歯別、男女別、年齢別並びに職業別に観察したところ、夫々の疾患毎に比較的著明な興味ある統計数値が得られ、又中都市に於ける官立大学

附属病院歯科の特色が現われている様に思われた。

入院患者は総数が237名で少ないので細部に亙る統計は差し控え、年度別と疾患別についてのみ観察したが、炎症と腫瘍が非常に多く総入院患者数の約80%を占めているのが注目された。

本論文の要旨は昭和30年9月11日第3回日本口腔科学会中国四国地方部会に於て講演した。拙筆するにあたり、終始御懇篤なる御指導、御校閲を賜つた前岡山大学医学部教授、現大阪大学歯学部教授今川与曹先生に深甚の謝意を表する。

## 文 献

- 1) 藤本平雄：歯科領域に於て観血的処置を要したる急性化膿性疾患の季節的、年齢的並びに部位的考察に就いて。口腔病学会雑誌，第9巻，第4号，昭10。
- 2) 中村平雄，前田量平：最近10ケ年間に於ける急性化膿性疾患の統計的観察。口腔病学会雑誌，第12巻，第6号，昭13。
- 3) 丸山芳郎：歯，口，顎疾患の性別的展望。臨牀歯科，第14巻，第6号，昭17前。
- 4) 丸山芳郎：歯，口，顎疾患の年齢的展望。臨牀歯科，第14巻，第9号，昭17後。
- 5) 筒井英夫：兎唇，口蓋裂の成因に関する研究。第一編，兎唇，口蓋裂の臨牀統計的観察，歯界展望，第8巻，第14号，昭26。
- 6) 中静 正，酒巻 毅：充填治療の統計的観察。歯界展望，第8巻，第5号，昭26。
- 7) 永田実（他）：上顎悪性腫瘍の統計的観察。（歯界展望，第8巻，第12号，昭26），日本耳鼻咽喉科学会々報，第54巻，第4号。
- 8) 藤田恒太郎：日本人の大白歯に於ける歯根の形態変異の統計的観察。（歯界展望，第8巻，第18号，昭26）解剖学雑誌，第55回総会号。

Dept. of Oral Surgery, Okayama University Medical School  
(Prof. Y. Watanabe)

The statistical observations of the out-patients and in-patients during  
five years since the opening of the Department of Oral Surgery,  
Okayama University Medical School.

By

Yukio Fujioka, Hajime Ono, Katsumi Nishijima, Gaiji Kagawa.

The statistic observations were made about the inpatients and out-patients of the department of oral surgery, okayama university medical school during full five years from July in 1950 to June in 1955.

The out-patients were classified into those of inflammation (pulpitis and gingivitis ex-

cepted), of caries (which was divided into what needed canal treatment and what was not so serious), of pyorrhea alveolaris, of gingivitis, of tumour, and of other diseases, and then each disease group was observed according to the difference year, season, tooth, sex, age, and occupation. Thereby, comparatively remarkable, interesting, statistical, numeral values were not only obtained concerning to each disease, but also the characteristics of the department of oral surgery of the attached hospitals of our government universities were apparently recognized here also.

As the total number of the in-patients was only 237, the detailed statistical report being reserved, they were observed only according to the difference of year and disease. Thereby, inflammation and tumour were so many that they occupied about 80% of the number of all the in-patients.